

Du Contrat social における Sovereign ととしての 〈peuple〉の意味構造

矢 次 真

はじめに

一 語と意味

1 翻訳語（日本語）レヴェルの問題

2 原語（フランス語）レヴェルの問題

3 *Du Contrat social* における語と意味の

関係（以上本号）

二 意味成分分析

1 方法

2 分析

三 *Sovereign* ととしての〈peuple〉の意味構造

おわりに

は じ め に

一般に、「主権は人民に存する、とルソーは主張した」と言われている。しかし、この人民という語が担わされている意味は、一体、何なのであろうか。

所で、人民という語が担わされている意味について考える前に、先ず、人民という語自体について考えて

みたい。その理由は、「主権は人民Vに存する、とルソーは主張した」と明言する人は、人民Vという語を、そもその日本語としては使用していない筈だからである。ルソーが自らの考えを表現するために使用した言語はフランス語であった。フランス語を母語としない人がルソーの考えを理解するためには、フランス語で表現されたルソーの考えをフランス語から直接理解する訳にはいかない。自らの考えを表現するために、ルソーが使用したフランス語がルソーによって担わされた意味を理解することから始めなければならない。フランス語を母語とする人は、ルソーが使用したフランス語がルソーによって担わされた意味を理解すればそれでよい。フランス語を母語としない人は、フランス語を母語とする人が経る作業をした上で、更に、ルソーによって担わされた意味を表現する母語を探し出さなければならない。その結果、日本語を母語とする人によって、ルソーによって担わされた意味を表現する日本語として選ばれた語こそ、人民Vという語であったのである。そうであるから、「主権は人民Vに存する、とルソーは主張した」と言うべきではなく、「日本語で表現し直せば、主権は人民Vに存する、とルソーは主張した」と言うべきなのである。所で、最初の問題は、フランス語で表現されたルソーによって担わされた意味が、日本語で表現し直されたという点に存する。日本語で表現し直されたその瞬間に、ルソーによって担わされた意味が消失するのである。人民Vという語は、ルソーによって担わされた意味を担いきることが出来ない。それは、人民Vという語が担い得る意味の限界にも因るのであるが、それ以上に、ルソーによって担わされた意味の独自性に関係しているのである。そもそも、ルソーの母語であるフランス語によってさえ、既存のフランス語を使用する限りでは、ルソーによって担わされた意味を表現することは無理であった。その意味では、フランス語を母語とする人でさえ、そのフランス語を通してルソーによって担わされた意味を理解出来ないものである。

そこで、本稿では、問題を「翻訳語（日本語）レヴェル」と「原語（フランス語）レヴェル」に分けて検討するこ

とにより、*Du Contrat social* の原テキストに基づかなければ、*Du Contrat social* におけるSouverainと peupleとの関係は、*peuple* の意味を理解出来ないことを明らかにし、続いて、*Du Contrat social* の原テキストに基づいたとしても、*peuple* というフランス語の一般的意味の理解のレヴェルでは、*Du Contrat social* におけるSouverainと peupleとの意味を理解出来ないことを明らかにする。*Du Contrat social* におけるSouverainと peupleとの関係という語の意味を理解するためには、*Du Contrat social* における語と意味の関係の特殊性の発見を前提として、*Du Contrat social* において使用されている *peuple* という語を全て分析するという作業を経なければならず、その結果、*Du Contrat social* において使用されている *peuple* という語の多義性が明らかになり、Souverainとしての *peuple* という語とそれ以外の *peuple* という語の識別が完了する。その上で、識別されたSouverainとしての *peuple* という特定の語がルソーによって担わされている独自の意味の構造を明らかにして設定された本稿の課題に対する最終的解答を提出したい。

(1) 本稿においてSouverainとフランス語の原語で叙述を進め、「主権者」という今日の日本においては慣習化している翻訳語を取って使用していないのは、「主権者」という翻訳語が、特に *Du Contrat social* においてルソーによって使用されているSouverainというフランス語の日本語への翻訳語としては適切ではないと思われるからである。「主権者」という翻訳語は、「者」という語を含むために、「人間」を連想させる。*Du Contrat social* においてルソーによって使用されているSouverainは、「人間」(自然人)ではないのであるから、翻訳語の読み手に誤解を生みやすい「主権者」という翻訳語は避けるべきであると思われる。桑原・前川訳、平岡訳、井上訳、作田訳は何れもSouverainというフランス語に対して「主権者」という翻訳語を当てている。

一 語 と 意 味

1 翻訳語（日本語）レヴェルの問題

先に、「主権はハ人民¹に存する、とルソーは主張した」と言うべきではなく、「日本語で表現し直せば、主権はハ人民²に存する、とルソーは主張した」と言うべきなのである、と述べたが、同様のことを、一般的には既に福田歓一氏が「日本における政治学史研究」において力を込めて説いている。⁽¹⁾ ここでは、政治学上の基本語が、殆ど古典古代起源であり、ヨーロッパ諸語を母語とする人にとっても、理解が困難である事情が説述されているのだが、ヨーロッパ諸語を母語としない日本人にとっては、理解は更に困難になるであろう。所が、「実体」を理解すると言う、時間がかかり骨の折れる、しかし当然に経なければならない先行作業が省略されて、「訳語に安らつて」「安心して、一つの訳語ですまし」「一つの訳語に機械的に固執する」態度がいつの間にか伝統化してしまった日本では、理解が更に困難になる所か、その困難性が気付かれることさえなくなってしまった。本稿のテーマとの関連で言えば、「主権はハ人民³に存する、とルソーは主張した」と言う場合のハ人民³という言葉は、もともととは、あるフランス語を日本語で表現し直すという作業の結果、様々な日本語の中から選び取られた一つの言葉であるに過ぎなかったのだが、時間の経過の中で、その言葉が絶対の独立した地位を獲得するに至り、その結果、「訳語に安らつて」「安心して、一つの訳語ですまし」「一つの訳語に機械的に固執する」態度が反省されることもなく、「日本語で表現し直せば、主権はハ人民⁴に存する、とルソーは主張した」と言う人もいなくなってしまうのである。⁽²⁾

ここでは、柳文章氏の提唱する、ハカセツト⁽³⁾ハカセツト効果⁽³⁾という考え方に学んで、「翻訳語ハ人民⁵」について考えてみたい。

柳父氏の「翻訳論における単語論の総まとめ」⁽⁴⁾と著者自身によって位置付けられた『翻訳語成立事情』と表題された作品において、柳父氏は、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」「自然」「権利」「自由」「彼、彼女」という、今日では翻訳語であるとは意識されることなく使用されている翻訳語の成立事情を克明に解明しているのだが、それらの翻訳語を「翻訳のために造られた新造語」「実質的に新造語に等しいことば」と「日本語としての歴史を持ち、日常語の中にも生きてきたことばで、同時に翻訳語として新しい意味を与えられたことば」⁽⁵⁾に先ず区分した上で、翻訳語としてのそれぞれの問題を順次検討していくのであるが、特に後者の場合、即ち「伝来の日本語を翻訳語として用いた場合」の問題点として、その翻訳語の中に「異なる意味が混在し、しかも矛盾している」という事実を挙げている。別の言い方をすれば、一つの翻訳語が一つの意味だけを担うのではなく、複数の意味、それも、お互いに対立しあい矛盾しあうような意味群を担っているという事実が問題点として指摘されているのである。

翻訳語を柳父氏はハカセツトVと名付け、独自の翻訳語論を展開している。柳父氏によれば、翻訳語はすべてそのようなカセツトなのであるが、例えば具体的に、「社会」という翻訳語については次のような説明が与えられる。「今日、私たちがsocietyを『社会』と訳すときは、その意味についてはあまり考えないでも、いわばことばの意味をこの翻訳語に委ね、訳者は、意味についての責任を免除されたように使ってしまうことができる。もちろん、ことばの使用者は、その使うことばの意味を、いつもよくかんがえていなければならないわけではない。が、かつて、societyに相当する日本語はなかったのである。そして、societyに相当する伝来の日本語がたとえなくても、『社会』という翻訳語がいったん生れると、societyに機械的に置き換えることが可能なことばとして、使用者はその意味について責任免除されて使うことができるようになる。『社会』とは、そのような翻訳語であった。そのことを、福沢の訳語『人間交際』は気づかせてくれるのである。」⁽⁶⁾また、「個人」という翻訳語については、「原語 individualの意

味を伝える翻訳をあきらめ、放棄し、『英華字典』經由の、違和感のある、意味の乏しい漢字造語に逃避した」結果であると柳父氏は考え、そのことは、原語 individual の「とらえ難い意味を、『四角張った文字』じたいにまかせろ」ことを意味するから、「これらのことはをいくら眺めても、考えても、individual の意味は出てこない」ということになる。つまり、individual ということばの意味を、「個人」という「未知のことばに、それから先は預ける」という形で翻訳が行なわれてきたと柳父氏は述べるのである。そして、「individual や society という文字を見れば、その意味についてあまり迷うことなく、ほとんど機械的に『一個人』『社会』『社会』という翻訳語をあてて解決したとする時代がやってくる」のであって、そのことは、基本的には今日までも続いているのである。

「社会」「個人」という翻訳語のように「翻訳のために造られた新造語」における問題に加えて、「日本語としての歴史を持ち、日常語の中にも生きてきたことばで、同時に翻訳語として新しい意味を与えられたことば」の場合には、更に困難な問題を生み出す。例えば、「自然」という翻訳語は、一方では「新しい nature の翻訳語としての意味」を担わされることになるのだが、他方では「古い伝統的な意味」「伝来の日本語の意味」を担い続けている。⁽⁸⁾本稿で問題とするハ人民 V という翻訳語も、一方では新しい peuple の翻訳語としての意味を担わされることになるのだが、他方では「古い伝統的な意味」「伝来の日本語の意味」を担い続けているので、我々はハカセット効果 V に悩まされ続けることになる。

所で、芳賀登氏は、『民衆概念の歴史的変遷』⁽⁹⁾と表題された興味深い作品において、様々な民衆概念と、それらを表現する夥しい数に上る語群を提示・分析しているのだが、芳賀氏が発掘したそれらの語群の中から、「翻訳語ハ人民 V」に変わり得る語を選び出すことが出来るであろうか。決して出来ない。そもそも、Du Contrat social においてルソーが設定した Souverain と *le peuple* という語を、日本語の翻訳語に置き換えるということが不可能

なのである。「翻訳のために造られた新造語」であろうと「日本語としての歴史を持ち、日常語の中にも生きてきたことばで、同時に翻訳語として新しい意味を与えられたことば」であろうと、それらの翻訳語は柳父氏の言うカセットに他ならない。翻訳語⇨カセットを手掛かりにして、原語に託された意味を理解することは、特定の基本語に關しては、断念されなければならない。

又、一九八九年現在の日本で出版されている代表的『仏和辞典』において提示されている、フランス語⇨peuple⇨に對する翻訳語は多数に上るが、その中からどの翻訳語を選び出しても、*Du Contrat social*においてルソーが設定したSouverainとしての⇨peuple⇨という語の意味を担わせることは出来ない。

特に、「翻訳語⇨人民⁽¹¹⁾⇨」というカセットは、フランス語⇨peuple⇨に對する翻訳語として独占的に使用されてきたばかりではなく、フランス語⇨peuple⇨の語源であるラテン語⇨populus⇨に對する翻訳語としては固より、英語⇨people⇨イタリア語⇨popolo⇨スペイン語⇨pueblo⇨ドイツ語⇨Volk⇨ロシア語⇨narod⇨等の諸語に對する翻訳語としても、重宝なカセットとして使用されてきたのであるから、「翻訳語⇨人民⁽¹²⁾⇨」というカセットにおける意味の混在は必然であつたと言わなければならない。

「翻訳語⇨人民⇨」というカセットは、現代日本人の思考を根強く緊縛し続けている。その主たる理由は、日本で生まれ育つた、日本語を母語とする現代日本人の全てが、先ず最初に⇨人民⇨という語に出会い、その⇨人民⇨という語を日本語として受け止めていたということ、続いて、意味不明のままその⇨人民⇨という語を読んだり使ったりする時期を経て、特定の意味を持つ語として⇨人民⇨という語を読んだり使ったりすることに拠り着き、その後初めて、⇨人民⇨という語が翻訳語であるということを知ったということに見出せる。外国諸語に對する翻訳語であることに気が付いたとしても、そのことは、フランス語⇨peuple⇨等が担っている意味と⇨人民⇨という語

が担っている意味の差異にも、直ちに気付くことを必然とする訳ではない。人人民Vという語が担っている意味を、安易に、そのまま人peopleVという語等に担わせることになる方が寧ろ普通である。人peopleVという語等が担っている意味自体を、人人民Vという語を頭から完全に排除して探究するという面倒な作業は、無意識の内に殆ど回避されてしまう。更に困難な問題は、人peopleVという語等が担っている意味自体を探究し、認識し得たとしても、「翻訳語人人民V」というカセットは消え去ることなくいつまでも残り続け、人peopleVという語等が担っている意味の理解を妨げ続けることである。⁽¹³⁾ 翻訳語(日本語)レベルの問題を、始めに、敢えて取り上げた理由も、実はここに存するのである。

(1) 福田歓一「日本における政治学史研究」(有賀弘佐々木毅編『民主主義思想の源流』東京大学出版会、一九八六年、所収)

(2) 人人民Vという語が、あくまでも翻訳語であることを意識し続けられないことから来る問題点については、社会科学の語一般についての内田義彦氏の次のような指摘からも確認することが出来る。「社会科学になると翻訳上の困難は、一層大きくになります。もともと社会学者の中には社会科学は思想ではないと割り切っている人もあり、事実また社会科学にはそういう立場、部門あるいは局面も結構多いので、そういうところでは、翻訳上とくに厄介な問題はないでしょう。しかし、たとえば古典の翻訳ともなると、社会科学でも思想としての浸透力、心のうち深く入ってそこから働きかける力を一般の人に対してももっていないわけなので、その独特の切れ味とか迫力を伝えようとすると、絶望的な困難にぶつかる。じつは、私は、社会科学については、大作家の、すでに古典となったものだけではなく、現在、お互いあまり偉くない人が発表し合う文章も、ある意味では古典を読むのと同じ態度でじっくり読まなきゃ読んだことにならないと考えているので、出来るだけそう読んでおりますけれども、日本語の社会科学の文章は、読みにくいのが多いんですね、そういうふうには読もうとしますと。私の貧弱な語学力でも、欧文の方が日本語で読むより社会科学の論理を身近かに、ふくらみをもって感じることが多い。解らなくなった場合なんかとくにそうです。小声で、くりかえし読んでみると、文章

が不意に、文章のリズムともども奥の方から理解されることがありますね。著者が、文章に託して言わんとしたものが、まさにものとして文章の奥にみえてくる。そのものを伝えるためには、文章はなるほどこうなっていなければならぬというかたちで、文章が解けると同時に、文章の壁が無くなって、ものそのものがじかに浮び上ってくる。私は、それを文章解読の要点と思っておりますけれども、そういう操作が、日本語の社会科学の文章では、まことにしにくい。字づらは読める。論理も筋道としてなら解ります。しかし、言葉どまりで、言葉の奥にあるものが、言葉を通じて、意味ともども実体として、直接に、浮び上ってこない。つまりは言葉が言葉としての役を果していない。外国語の方が、まだしも私にとつて言葉になっているなあと、思うことがあります。それだけに、社会科学的に正確で、正確であるゆえに達意の文章に接すると救われる思いがしますが、同時に、御本人の努力は大変だったろうなあという思いもするのです。なんだか日本語はだめで、外国語でなきゃというふうな話に聞えたかも知れませんが、私の言いたいことはもちろんそうじゃありません。社会科学的思想が、言葉によって育ってくるような、そういう日本語をどうしたら手に入れられるか、ということなんです。」(内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店、一九八一年、三三―三四頁) 引用が長くなりすぎたが、ここで内田氏が述べていることは、「主権は人民に存する」という命題における人民Vという語と、その語が担っている意味の関係について考える上で貴重な示唆を与えてくれると思われる。

所で、*Du Contrat social*の日本語への翻訳者達は異口同音に翻訳の困難を告白している。桑原武夫氏はその翻訳書の「まえがき」において、「訳文はできるかぎり読みやすくしようと志し、漢字は当用漢字だけにしたかったが、少しはみ出した。それにはルビがふつてある。もつとも、いくら表記法をやさしくしても、ルソーの考え方そのもののむつかしさは、どうにもならない。考えながら読んでほしい。『注意を払おうとしない読者にわからせる方法を、わたしは知らないのだ』とルソーもいつている。たとえば、『主権者』(Souverain)という言葉は、彼においては、社会契約をむすんで一体となった人民全体のことをさすので、決して一個の人間をさすのではないこと、をつねに頭に入れておかねば、この本はわからない。また『統治者』という言葉にも注意していただきたい。これは『Prince』の訳語である。『フランス』というのは、第三編第一章にも定義されており、また『エミール』では、『支配者の全体は、それを構成する人々の面から考察されるとき、政府とよばれる』といっている。つまり、それは国王とか大統領とかいう一個の人間ではなく、集合的にして

精神的な人格をさすのである。ただ、ルソーは、このフランスという言葉を、普通世間の、君主という意味に使っているところもあるので、そのさいは『王公』と訳して、『君主』(monarque)と区別しておいた。『Peuple』という言葉は、『人民』『国民』『民族』などと訳せるが、なるたけ統一的に『人民』と訳しておいた。『人民』という言葉は広い意味にとっていただきたい。『magistrat』には前後の關係によって『行政官』と『役人』という二つの訳語を用いてある。」(桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』岩波書店、一九五四年、四―五頁)と、翻訳語についての注意を長々と、翻訳書の読者に向けて書かなければならなかったし、井上幸治氏は、その「解説」において、「この本は簡潔な純粋論理で構成されているため、しごとはかなり困難であった。」(井上幸治訳『社会契約論』中央公論社、一九七四年、二〇三頁)と述懐しているし、作田啓一氏も、その「解説」において、「本書においては、緻密な推論が簡潔なスタイルのなかに押しこめられているので、一般の読者にはけっして読みやすいものではない。」(作田啓一訳『社会契約論』白水社、一九七九年、四九一頁)と指摘しているし、平岡昇氏も、その「解説」において、「この本は、その永久に新鮮な魅力にもかかわらず、けっして読みやすくないし、ただ論理を追うだけで理解されるのにも適していない。」(平岡昇訳『社会契約論』角川書店、一九六五年、二〇五頁)と警告している。上記の翻訳者達も、*Peuple* というフランス語に対する翻訳語として、今や不動の地位を獲得したかに思われる、*人民* という翻訳語を採用している。

(3) 「ことばは、もともと『カセット』のようなものだ、と私は考える。『カセット』とは、*cassette*、つまり箱の小さなもので、フランス語で言う *cassette* であり、宝石箱という意味で使われる。テープ・レコーダーで使うカセット・テープも、同じ意味から出ている。小さな宝石箱がある。中に宝石を入れることができる。どんな宝石でも入れることができる。が、できたばかりの宝石箱には、まだ何も入っていない。しかし、宝石箱は、外から見ると、それだけできれいで、魅力がある。その上に、何か入っていいそうだし、きつと入っているだろう、という気持ちがある。見る者を惹きつける。新しく造られたばかりのことばは、このカセットに似ている。それじたいが、第一に魅力である。そして、中にはきつと深い意味がこめられているに違いない、という漠然とした期待がある。人々を惹きつける。美しい宝石箱は、人々に求められ、飾られたりするが、やがて、宝石をしまうのに使われる。はじめに、それが美しいから求められ、やがて使われるのである。ことばは、生れたはじめには意味は乏しい。意味は乏しくても、ことばじしんが人々を惹きつける。だから使われ、やがて豊かな意

味を持つようになるのだ、と私は考える。そのはじめに、意味ではなく、その働きによってではなく、ことばだけが魅力である、という体験がなければ、人は結局ことばを使いこなせなかったであろう。翻訳語は、私たちにとって、新しいことばである。とくに翻訳のために新しく造られたことばは、不意に目の前に現われたカセットのようである。このようなことばに特有の現象や機能や効果などを、ひっくり返して、私は『カセット効果』と呼ぶことにしよう。』（柳父章『翻訳とはなにか——日本語と翻訳文化——』法政大学出版局、一九七六年、二四—二五頁）。柳父章氏のハカセット効果の概念に示唆を受けた研究としては大久保泰甫「近代日本における輸入情報の『処理』——法律用語の場合——」（竹内敬人編『言語とコミュニケーション』東京大学出版会、一九八八年、所収）

(4) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波書店、一九八二年。

(5) 同右、ii頁。

(6) 同右、八一—九頁。

(7) 同右、四二頁。

(8) 翻訳語「自然」を巡る詳細な研究は、柳父章『翻訳の思想——「自然」とnature』平凡社、一九七七年、参照。

(9) 芳賀登『民衆概念の歴史的変遷』雄山閣出版、一九八四年。

(10) フランス語へpeopleへに対する日本語の翻訳語を、『仏和辞典』を資料として、以下に列举する。(1)「民族」(OR, SR, TS, SC, HD) (2)「国民」(OR, SR, TS, SC) (3)「人民」(OR, SR, TS, SC, HD) (4)「臣民」(OR, SR) (5)「大衆」(OR, SR, TS) (6)「民衆」(OR, SR, TS, SC, HD) (7)「庶民」(OR, SR, TS, SC, HD) (8)「下層階級」(OR) (9)「群衆」(OR, SR, TS, SC, HD) (10)「観衆」(OR, SR, TS) (11)「住民」(OR, SR, TS, HD) (12)「市民」(OR, TS) (13)「族」(SR) (14)「民」(SR, TS, HD) (15)「人」(SR, TS, SC, HD) (16)「皆」(SR) (17)「良民」(TS) (18)「平民」(TS) (19)「トタ」(TS) (20)「沢山の人」(TS) (21)「公衆」(TS) (22)「世間の人々」(TS) (23)「庶民階級」(SC, HD) (24)「人々」(SC) (25)「市民たち」(HD) (26)「国民大衆」(HD) (27)「群」(HD) 使用した『仏和辞典』の名称及び略号は次の通りである。①田村毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社、一九八五年（略号：OR）②小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編『小学館ロベール仏和大辞典』小学館、一九八八年（略号：SR）③鈴木信太郎ほか『新スタンダード仏和辞典』大修館書店、一九

八七年（略号：TS）④大槻鉄雄ほか編『クラウン仏和辞典（第二版）』三省堂、一九八三年（略号：SC）⑤伊吹武彦ほか編『仏和大辞典』白水社、一九八一年（略号：HD）

(11) 代表的国語辞典及び百科事典における「人民」の説明は次の通りである。「国家を構成し、社会を組織している人々。ふつう、支配者に対する被支配者、官位のない一般の人々をさしている。」（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第一巻、小学館、一九七四年、二五六頁）、「広い意味では国家の構成員を指し、国民と同義であるが、狭い意味では国民のなから既存の支配層を除いた部分、すなわち被支配層としての国民を指す。こうした対比でみれば、国民が支配層を含めた全体の一体性を強調する概念であるのに対し、人民はむしろ被支配層の連帯と解放を重視する概念として用いられることが多い。人民主権▽や人民民主主義▽などの用例は、いずれもこれまで抑圧されてきた被支配層の解放によって、彼らが真の連帯を実現するために、主権や民主主義を用いるとの意味を含んでいる。その意味で、人民はマルクス主義者など左翼勢力に用いられることが多い。ただ、アメリカ合衆国では単一民族を基盤とした国民の観念が成立せず、しかも平等主義的傾向が強力であるため、左翼的伝統の欠如にもかかわらず、人民が国民の意味で用いられた。リンカンの人々、人民による、人民のための政治▽は、その典型的な用例。」（下中直也編『世界大百科事典』第一四巻、平凡社、一九八八年、四七〇頁）

(12) 例えば、Société des Amis du Peuple（人民の友協会）、Front Populaire（人民戦線）、People's Charter（人民憲章）、Volksgericht（人民裁判）、Nardnaya volya（人民の意志派）、Khazdenie v narod（人民の中へ）等。「日本語人主権▽」の今日における驚くべき多義（polysemie, polyseny）に気付かされる。

(13) 『訳字』と『原意』との違いを、思想として意識的に知っているだけでは、とうていカセット効果を押えることではないのである。（柳父章『翻訳とはなにか——日本語と翻訳文化——』法政大学出版局、一九七六年、七五頁）

2 原語（フランス語）レヴェルの問題

こゝでは、「主権は人主⁽¹⁾に存する、とルソーは主張した」という命題における人主⁽¹⁾というフランス語の意味を巡る、フランス語を母語とする人達の最近の代表的議論を検討してみよう。というのも、フランス語を

母語とする人達、それもルソー政治学の専門的研究者、フランス公法学の代表的研究者であるような人達の間にいてでさえ、「主権は△peuple▽に存する、とルソーは主張した」という命題における△peuple▽というフランス語の意味の解釈が一樣ではないからである。

例えば、ジャック・ジュリアールは、「l'idée de souveraineté populaire (人民主権思想)の歴史的影響についての論文」という副題を持ち、『ルソーの誤謬』⁽²⁾と表題された作品の中で、ルソーの l'idée de souveraineté populaire (人民主権思想)について興味深い議論を展開しているのだが、ここでは、ジュリアールの△peuple▽理解という点に焦点を絞って簡単な検討を試み、続いて、「カレド・マルベールが souveraineté du peuple (ププル主権)と souveraineté nationale (ナシオン主権)の区別を発明したのではなかった。」⁽³⁾という挑戦的な宣言文でその冒頭が飾られている、フランス政治史・憲法史・政治思想史に関心を持つ研究者、更に、主権論一般に関心を持つ研究者にとっては大いに興味をそそられる、ギヨーム・バコによる『カレド・マルベールと souveraineté du peuple (ププル主権)・souveraineté nationale (ナシオン主権)区別の起源』と表題された作品を、*Du Contrat social*におけるルソーの△peuple▽理解という点に焦点を絞って簡単に検討してみよう。

*Du Contrat social*におけるSouverainとしての△peuple▽という語の意味に対してのジュリアールの理解は、「フランス革命とルソー」という視角からの理解であるという点で特徴的である。「フランス革命とルソー」あるいは「フランス革命を起源とする近現代フランスとルソー」という問題関心からのルソー理解、*Du Contrat social*理解という枠組みを前提として、ジュリアールは *Du Contrat social*におけるSouverainとしての△peuple▽という語の意味を理解しているので、*Du Contrat social*のテキストを参照・引用したり、*Du Contrat social*やルソー政治学の専門的研究書⁽⁴⁾を参照・引用したりしているとしても、その理解は、*Du Contrat social*のテキスト分析に基づ

く理解ではないので問題である。このような理解は、フランスにおいては、一つの典型であると思われる。よきにつけ悪しきにつけ、現在に迄至る近現代のフランス史がフランス革命を起点としているのであるから、そのような理解の枠組みのフランスにおける支配は避け難いであろう。しかし、*Du Contrat social* のテキスト分析を前提としないで、フランス革命期の文献やフランス革命後の文献における *Du Contrat social* の解釈に依存する解釈は、フランス革命期の文献やフランス革命後の文献のイデオロギー被規定性について考える時、問題を露呈するであろう。

Du Contrat social における *Souverain* としての *le peuple* という語の意味に対してのギヨーム・バコの理解は、次の様に要約することが出来るであろう。

カレ・ド・マルベールは *Du Contrat social* における *Souverain* としての *le peuple* という語の意味を *chaque citoyen pris séparément* と解釈していたが、バコは、その解釈を誤りであると断定し、*leur seule collectivité* が *Du Contrat social* における *Souverain* としての *le peuple* という語の意味であると結論する。⁽⁵⁾ 確かにバコの言う通りなのであるが、しかし、そんなことは敢えて言う迄もないことであって、*Du Contrat social* のテキストに従えば当然のことなのである。問題は、その先にこそ存するのであって、*leur seule collectivité* の意味をこそ説明しなければ何にもならないのである。citoyen の意味も、collectivité の意味も、バコにおいては全く説明されていないばかりか、それこそが問題であるということさえ気付かれていないのである。バコにおいても、*Du Contrat social* のテキスト分析が欠落している。

以上の簡単な検討から、*Du Contrat social* における *Souverain* としての *le peuple* という語の意味の理解が、フランス語を母語とする人達の間においてさえ、一様ではないということが明らかになったと思われる。

(1) *Du Contrat social* にある「主権は人々に存する」という表現を発見することは出来ない。フランスの諸憲法においては「主権は人々に存する」という表現に類似した表現が『一七九三年憲法』『一九四六年憲法』『一九五八年憲法』の中に見出せる。La souveraineté réside dans le peuple; elle est une et indivisible, imprescriptible et inaliénable. (Acte Constitutionnel du 24 juin 1793, Déclaration des droits de l'homme et du citoyen, Art. 25) La souveraineté nationale appartient au peuple français. (Constitution du 27 octobre 1946, Art. 3) La souveraineté nationale appartient au peuple, qui l'exerce par ses représentants et par la voie du referendum, (Constitution du 4 octobre 1958, Art. 3) フランス革命期の憲法構想及び憲法、フランス革命後の憲法構想及び憲法に当初の関心を持つ研究者は、Souverain は人々、nation にか、という問題に強い関心を寄せ、その関心の延長線上で *Du Contrat social* における Souverain と人々、人々を問題とするのに対して、近代政治原理の形成（近代）ヨーロッパ政治思想史に当初の関心を持つ研究者は、*Du Contrat social* における Souverain と人々、人々を問題とする場合一般的には、Souverain は人々、nation にか、という問題を念頭に置いているように思われる。近代憲法との関係にあって Souverain は人々、nation にか、という問題に本格的に取り組んでいる研究として、Stéphane Pierre-Caps, *Nation et Peuple dans les Constitutions Modernes*, vol. 1-2, Presses Universitaires de Nancy, 1987. 参照。

- (2) Jacques Julliard, *La faute à Rousseau*, essai sur les conséquences historiques de l'idée de souveraineté populaire, éditions du Seuil, 1985.
- (3) Guillaume Bacot, *Carré de Malberg et l'origine de la distinction entre souveraineté du peuple et souveraineté nationale*, Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1985.
- (4) Robert Derathé, *Jean-Jacques Rousseau et la science politique de son temps*, Vrin, 1970, 2e édition, Pierre Manent, *Naissances de la politique moderne. Machiavel, Hobbes, Rousseau*, Payot, 1977., Bertrand de Jouvenel, *Essai sur la politique de Rousseau*, Editions du Chevalaire, 1947., etc.
- (5) この点については、渡辺良二『近代憲法における主権と代表』法律文化社、一九八七年、光信一宏『フランスにお

る最近の主権論——G・バコ教授の所説について」〔法律時報〕七三八号、一九八八年、所収）小沢隆一「カレ・ド・マルベールの『国民主権』論的方法的基礎に関する覚書」〔一橋論叢〕第一〇一卷第一号、一九八九年、所収）辻村みよ子「フランス革命の憲法原理」日本評論社、一九八九年等を参照。

3 *Du Contrat social* における語と意味の關係⁽¹⁾

Du Contrat social を執筆するに際して、ルソーは、自らの新しい考えを表現しようとする時、自らの新しい考えを担わせることが出来る語を、既存の語群の中から、神経を集中して、慎重に選取り使用していた。それ故、ルソーによって書かれた文章を読む者も、神経を集中して、慎重に一語一語に向かわなければならないであろう。所で、既存の語群の中に、自らの新しい考えを担わせ得る語を見出せるならば問題はないのであるが、しからざる場合には、深刻な事態に立ち至る。採るべき道は、自らの新しい考えの表現を断念するか、あるいは、既存の語群の中から相対的に最適の語を選び取り、その語に意味伝達を、不安な気持ちで託するかである。結局、ルソーは後者の道を選んだ。しかし、その語では、本当の所、ルソーが表現を意図した意味を読み手に伝達することは出来ない。所で、ルソーが採用しなかった一つの道がある。既存の語群の中からでは、自らの新しい考えを託するに足る語を探し出すことが出来ないならば、新たに、自らの新しい考えを託するに足る語を造り出すという道である。この道のあることをルソーは知っていたであろう。しかし、ルソーはこの道を選ばなかったのである。⁽²⁾その結果、読み手は理解に困難を感じることもなく読み進んで行くであろう。そこには、読み手にとって既知の意味を担う既知の語が並べられているからである。所が、それらの語がルソーによって担わされていた意味は、ルソー独自のものであって、既存の語が通常担わされていた意味ではなかったのである。結局、ルソーの苦心の表現は徒労に終わり、独自の意味は取り残されてしまったのである。

ここでは、ルソーが、語と語が担っている意味の関係について取り分け強い関心を抱いていたということ、語を使用するに際して、既存の語が一般的に担っている意味を批判し、既存の語を、自らの新しい考えを表現するための道具として使用していたということを確認する限りで、*Du Contrat social*のテクストを簡単に検討し、*Du Contrat social*におけるSouverainとしての〈peuple〉の意味構造を認識するためには*Du Contrat social*におけるpeupleという語の意味成分分析を欠くことが出来ないことを明らかにしておきたいと思う。

ルソーは*Du Contrat social*の読み手に向けて、一方で自説を展開しながら、もう一方では、読むに際しての注意を所要所で与えている。

lecteurs attentifs, ne vous pressez pas, je vous prie, de m'accuser ici de contradiction. Je n'ai pu l'éviter dans les termes, vu la pauvreté de la langue; mais attendez. (Livre II, chapitre IV, p. 373)⁽⁷⁾

lecteurs attentifs (注意深い読み手諸君)に向けて、ルソーは自らの新しい考えの言語手段による表現の困難性を訴えている。書き手が自らの考えを、一般に通用している既存の言語を使用して表現すれば、読み手は、書き手によって書かれた言語を一般的な言語として受け止めるであろう。

ルソーが予定している*Du Contrat social*の読み手はlecteurs attentifsであると共にlecteur judicieux (p. 443) である。

Toutes mes idées se tiennent, mais je ne saurois les exposer toutes à la fois. (Livre II, chapitre V, p. 377)
ideesの言語表現の限界が指摘されている。

J'avertis le lecteur que ce chapitre doit être lu posément, et que je ne sais pas l'art d'être pour qui ne veut pas être attentif. (Livre III, chapitre I, p. 395)

第三編第一章の冒頭に置かれているこのテキストは、第三編第一章を読むに際しての読み手に対する注意の喚起などではあるが、この章を読む時にのみ気を付けるべき心得であるばかりではなく、*Du Contrat social* 全体を読むに際しての一般的注意でもある。このテキストの宛先は、ルソーにとつての同時代人なのであるから、この章を読むに際しての限定的注意としてこのテキストをここに置けばよいとルソーは判断したのであろうが、フランス革命以降の時代・世界に生きる読み手をルソーが念頭に置いていたとすれば、フランス革命時代及びフランス革命以降の *Du Contrat social* のイデオロギー的解釈・先行理解・前了解を免れさせるために、「緒言」に置き換えたであろうと思われる。何れにしてもルソーは *Du Contrat social* が正確に理解されないことを十分予測しているものであり、そのことを深く懸念していたからこそ、自らの新しい考えを次々と一方的に展開するばかりではなく、読み手が読み誤らないための工夫を試みていたのだと思われる。

ルソーは独自の「名付け」を試みている。⁽⁴⁾ J'appelle <A> 、と⁽⁴⁾いう表現、J'entend par ce mot <A>、という表現、on peut appeller <A> と⁽⁴⁾いう表現、on peut donner le nom de <A> と⁽⁴⁾いう表現で「名付け」を独自に行なっている。既存の語に、通常その語が担わされている意味とは異なる、ルソー独自の意味を強引に担わせているのである。具体例を幾つか提示してみよう。⁽⁴⁾

C'est cet acte que j'appelle une loi. (p. 379)

cet acte に une loi と「名付ける」のはルソーであって、une loi という語は cet acte という意味とは別の意味を既に担って一般に使用されているとしても、ルソーは、une loi という語を cet acte という意味を担う語として使用するのである。

une loi という語は、全く新しい意味を強引に担われた。une loi という語は、*Du Contrat social* において、
 ーによって構想された、理論レヴェルの新しい政治社会を表現するために構成された vocabulaire (語彙) 構造の中
 で理解されなければならない。

同様の例は以下のテクストにおいても確認される。

J'appelle donc République tout Etat régi par des loix, sous quelque forme d'administration que ce puisse être:
 (p. 379)

Je n'entends pas seulement par ce mot une Aristocratie ou une Démocratie, mais en general tout gouverne-
 ment guidé par la volonté générale, qui est la loi. (p. 380)

; à l'égard de l'égalité, il ne faut pas entendre par ce mot... (p. 391)

Les loix qui reglent ce rapport portent le nom de loix politiques, et s'appellent aussi loix fondamentales, non
 sans quelque raison si ces loix sont sages. (p. 393)

; Celle-ci sous le nom de *puissance législative*, l'autre sous le nom de *puissance exécutive*. (p. 395)

Les membres de ce corps s'appellent Magistrats ou *Rois*, c'est-à-dire, *Gouverneurs*, et le corps entier porte
 le nom de *Prince*. (p. 396)

J'appelle donc *Gouvernement* ou suprême administration l'exercice légitime de la puissance exécutive, et
 Prince ou magistrat l'homme ou le corps chargé de cette administration. (p. 396)

; secondement la volonté commune des magistrats, qui se rapporte uniquement à l'avantage du Prince, et qu'
 on peut appeller volonté de corps, laquelle est générale par rapport au Gouvernement, et particuliere par

rapport à l'Etat, dont le Gouvernement fait partie; (p. 400)

On donne à cette forme de Gouvernement le nom de *Démocratie*. (p. 403)

Ou bien il peut resserrer le Gouvernement entre les mains d'un petit nombre, en sorte qu'il y ait plus de simples Citoyens que de magistrats, et cette forme porte le nom d'*Aristocratie*. (p. 403)

Cette troisieme forme est la plus commune, et s'appelle *Monarchie* ou Gouvernement royal. (p. 403)

Pour donner différens noms à différentes choses, j'appelle *Tyrann* l'usurpateur de l'autorité royale, et *Despote* l'usurpateur du pouvoir Souverain. (p. 423)

...ces mots de *sujet* et de *souverain* sont des corrélations identiques dont l'idée se réunit sous le seul mot de Citoyen. (p. 427)

...l'on fait passer faussement sous le nom de Loix des décrets iniques qui n'ont pour but que l'intérêt particulier. (p. 438)

Ce corps, que j'appellerai *Tribunal*, est le conservateur des loix et du pouv'r législatif. (p. 454)

..., et ce qu'on peut appeller le droit divin naturel. (p. 464)

..., auxquelles on peut donner le nom de droit divin civil ou positif. (p. 464)

On peut appeller celle-ci la religion du Prêtre. (p. 464)

以上の簡単な検討を通じて、*Du Contrat social*におけるSouverainとしての「*peuple*」の意味構造を認識するた
めには、*Du Contrat social*における「*peuple*」という語の意味成分分析を欠くことが出来ないことが明らかになった

であろう。辿り着いた一つの結論は、「主権は人民に存する、とルソーは主張した」という命題は何を意味しているのか、という本稿の問題に答を与えるためには、*Du Contrat social*において使用されている人民という日本語の翻訳語の原語であるフランス語のpeopleを、全てに亘って分析するという作業に取り組まなければならないということなのである。無駄な骨折りとも思われるような、その作業が要請される原初の理由は、ルソーが自らの考えの表現に、結局は失敗したという点に存する。表現されずに隠されてしまったルソーの考えを、即ち、伝達されずに取り残されてしまったルソーの考えを、今、改めて掘り起すためには、それでも、*Du Contrat social*のテキストに戻るの外はないのである。*Du Contrat social*のテキストに戻って、一つ一つの語のレヴェルからの分析を再開することこそが、ルソーの考えに辿り着く早道なのである。

「主権は人民に存する、とルソーは主張した」と言う時の人民は、日本語という一つの言語への、*Du Contrat social*においてルソーが使用した特定のpeopleというフランス語からの一つの翻訳語に過ぎなかったのであるから、人民という日本語を頼りに、*Du Contrat social*においてルソーが使用した特定のpeopleという語がルソーによって強引に担わされた意味を理解することは不可能であったし、又、peopleという語が担っている通常の意味で、*Du Contrat social*における特定のpeopleという語をルソーは使用してはいなかったのであるから、peopleというフランス語を頼りに、*Du Contrat social*においてルソーが使用した特定のpeopleという語がルソーによって強引に担わされた意味を理解することも不可能であった。ルソーによって、強引に担わされた意味の解明という、最終目標に到達するためには、避けることの出来ない前述の作業こそ、続く課題とならなければならない。

(1) 『ジャン・ジャック・ルソー論』(東京大学出版会、一九八八年)と表題された刺激的な作品において、吉岡知哉氏は、「ルソーにおける語と意味の関係」という問題を巡っても興味深い指摘を行っている。

(2) 「ルソーにおける語と意味の関係」という問題については、「思想表現の造語力」という観点からの福田氏の次の指摘が傾聴に値する。「…ルソーにとって、思想を概念に定着するのは、決して容易な作業ではなかった。同じ用語が作品によって異なった意味に使われるばかりではない。同じ作品の中でさえそうであったことは、『エミール』第二巻で、一つの言葉を一つの意味に使うことなどとてもできない」として、コンテキストに即した用法を宣言している通りである。…この関連で気付くのは、ルソーは造語力が貧弱であって、既成の概念で説明できない思想内容に、新たに適確な表現を与えることができなかった点である。…『一般意志』のような最もユニークな、いわば彼の政治思想の結節点となる概念さえ、自分でその内容にふさわしい表現を作り出した造語ではなくて、直接にはデイドロがまったく別の意味に使ったのを借用したにすぎない。」福田歓一『ルソー』講談社、一九八六年、一〇一―一頁。

(3) 本稿においては『*Du Contrat social*』からの引用は頁数だけを記す。使用したテキストは、プレイヤード版『ルソー全集』第三巻に収められたテキストである。

(4) ルソーによる独自の「名付け」ではなく、通常の一般的「名付け」は、*On appelle*、*On donne le nom de* という形で示されている。以下に、関係する箇所を例示する。

C'est ainsi qu'à Venise on donne au college le nom de *serenissime Prince*, meme quand le Dogen y assiste pas. (p. 396)

A-peu-près selon le sens qu'on donne à ce nom dans le Parlement d'Angleterre. (p. 428)

Ce mot de *finance* est un mot d'esclave; il est inconnu dans la Cité. (p. 429)

C'est ce qu'en certains pays on ose appeller le Tiers-Etat. (p. 429)

A Genes on lit au devant des prisons et sur les fers des galériens ce mot *Libertas*. (p. 440)

…qui de cette division prirent le nom de *Tribus*. (p. 444)

…à la tête desquelles on mit des chefs appelés *Curions* et *Décursions*. (p. 444)

Outre cela on tira de chaque Tribu un corps de cent Cavaliers ou Chevaliers, appelé Centurie: (p. 444)

Le nom de *Rome* qu'on prétend venir de *Romulus* est Grec, et signifie *force*; le nom de *Numa* est grec aussi, et

signifie *Loi*. Quelle apparence que les deux premiers Rois de cette ville aient porté d'avance des noms si bien relatifs à ce qu'ils ont fait? (p. 444)

(未完)